

竜 口 法 難 論

竜の口の法難は終った。

キリスト教徒の内村鑑三は聖人の竜の口の法難を批評して、竜の口で日蓮が処刑されていたら、もっと日蓮教徒はふえていたろうというようなことをいっておる。日蓮が処刑されていたら、日蓮の教徒は奮起し、運動を起こして、日蓮教徒は現在の数の倍あったろうというようなことをいっておるが、それは、日蓮聖人を少しも理解していない無責任な放言である。キリスト教徒はキリストが処刑されたことを誇りにしておるが、仏教の方の考えからいうと、これは決して誇りとはならない。

仏教では聖人に横死なしという言葉があつて、聖人は横死をしないのである。聖人というのは仏の別名で、開目抄には仏を聖人と称するとある。仏様は横死をしないということになつてゐる。だから、キリストが十字架にかかったことをキリスト教徒は万人の罪のつぐないであるとかいって美化しておるが、仏教徒から見ると、それは受けとれないことになる。

十字架の処刑は横死とみるのである。横死とは字典によれば、禍実によつて、天命を完うしないで死ぬこと、非命の命、変死などと出ておる。横死九法ということがあつて、僧祇律、すなわち僧侶の守るべき戒法なるものがある。だから僧侶で横死をするようなことがあつてはならない。目連尊者は竹杖外道に叩かれて死んでしまつたが、釈尊はこれは横死のうちに数えないで、竹杖外道と目連尊者との前世の因縁を説かれておる。

ちなみに横死九法ということをごに掲げておく。横死に九の原因があるといふのである。

一、饒益の食（沢山なご馳走をたべるとはいけない）にあらざることを知つて貪食（うんとたべる）する。

二、量をはからずして食う。

三、未だ消化せざるに食う。

四、強いて摘吐す。（指をつつこんで吐く）

五、すでに消化して出さんと欲するに強いて抑制する。（便をこらえてはいけない）

六、食の病に随わず。

七、病に随つて量をはからず。

八、服薬をおこたる。

九、知慧なく心をととのうる能わず。

以上が横死九法という、僧侶の守るべき戒律であるが、現代の世の中でも結構参考になると思うので引用したのである。

消化器官関係のことばかりであると思う人があるかも知れないが、命は食にあるという言葉があるから、食ということを一番大切に考えたのであろう。

今は横死といえ、交通事故で死ぬことをいうが、仏教の方では、天寿を完うしないのも横死と考えているのである。

私は説教でよくいうが、日蓮大聖人は南無妙法蓮華経と唱えて仏になるべきこと肝要なりと、私どもに教えていますが、皆さんは、仏さまが、病気で寝ていると考えたことがありますか。ありますまい、仏様が神経衰弱で弱っているというようなことはない。仏様が借金で苦しんでおるといようなことはない。仏様がすむ家がないというようなことはない。すべての仏はみな自分の仏国土をもつてすんでいるのである。借家にすんでおるといような仏様はない。すべて自分の家にすんでいる。大聖人さまは、私達に南無妙法蓮華経と唱えて、仏になるべきこと肝要なりと仰せられておりますが、私達にとつての仏という意味は、以上のようなものでなければならぬ。

昭和三十四年度の「厚生白書」によると、昭和三十三年の平均寿命は、男が六四・九年、女が六九・六年、と有史いらいの記録というが、まだまだ欧米諸外国の平均寿命に劣るということ

ある。ここに悲しむべきことは、十五満未満の児童では、死因の第一順位が交通事故を含めた事故死であること、十五歳から二十四歳までの年令層では自殺が死因順位のトップであるばかりではなく、世界でも最高位であるということである。そうすると、日本は横死では世界第一ということになる。毎日毎日交番の前に、東京では、前日の死亡者と負傷者の人数が掲示されておるが、これも慢性になると恐ろしいもので、「今日はすくないなあ」と考えたり、死亡者の数が〇の時は、なんだかものたりない、とは考えないだろうが、まあ不思議に思ったりするのも人情だろう。

南無妙法蓮華経と唱えて、大聖人さまの弟子だと自認するものは、絶対に横死なぞしてはならない。無上道を惜しむが故に、わが身をおしむという言葉がおる。南無妙法蓮華経を唱えておるから大丈夫だといって、わが身を大切にしないようなことがあつてはならないとの意味である。お題目を唱えておる大切な身体だから、暴食暴飲も、他人よりは少しは謹しむという心がけが大切である。

さてキリストは刑場で、最後に、「主よ、なんぞわれをみすて給うや」と叫んだということであるが、聖人は、竜の口の斬首にのぞんでは、

「今夜頸きられへまかるなり、この数年が間願いつることこれなり、この娑婆世界に生きてきじとなりし時は鷹につかまれ、鼠となりし時は猫にくらわれき、あるいは妻子、かたきに身を失い

し事、大地微塵より多し、法華經の御ためには一度だも失うことなし。されば、日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心にたらず、国の恩を報ずべき力なし、今度頸を法華經に奉りて、その功德を父母に回向せん。そのあまりは弟子檀那等にはぶくべし」(全集九一三ページ)

と述懐されておる。キリストと聖人の生死観では天地雲泥の相違ではないか。聖人は法華經に命をささげることを目的としておるのである。だが、その法華經には、法華經の行者に刀をくわえるものがあれば、刀の方がこなごなになると書かれておるが、その通りになったのである。竜の口の法難は、実は法華經にも予言されておることなのである。故に聖人が、自から、この数年の間、願いつることこれなりと竜の口の法難をさしたのである。現代の言葉でいうならば、竜の口は聖人にとって聖人の法華經の実験証明なのである。だから聖人が、この数年の間、願うることこれなりといわれたのである。「聖人出現して実の如く法華經を説かん時……」という言葉がある。この言葉は聖人が自らいわれた言葉である……その時には、種々なる大難が起るといわれたが、その難のあることが、聖人出現の証明、仏さま出現の証明なのである。だから、竜の口は聖人出現の証明なのである。ただし竜の口の証明があったから、自分が仏であると悟ったなどというものではないことを断っておく。仏さまだけは自分から、自分が仏さまであるというのである。

新興宗教の教祖みたいに「どうだ、俺の宗旨も流行するではないか、こんなに信者がふえたん

では、俺も仏さまかもわからんぞ、この辺で仏さまだと、はたに宣言して、もつと信者をふやそうではないか」「そうすなあ、きつとあんたには、教祖的性格があるんですよ、この辺で、仏さまだと、官言したらよいでしょう」などと、側近からいわれて、仏なぞといいだすのは、近頃の話である。

「日蓮と名のること自解仏乗なり」と聖人はいわれておる。明らかなること日月にすぎんや、浄きこと蓮華にすぎんやとの聖人の自負の内証を考えねばならない。釈尊も昔、ニレンゼン河の畔において、暁の明星をみて確然として、われは仏なり、覚者なりといわれたのである。釈尊が仏だと宣言をしたので、従者は、ゴータマは狂せりといつて逃げてしまったという話がある。

日蓮と名乗られたことが、仏である証拠、聖人の証拠であることを知らねばならない。

日蓮正宗以外の宗派では、竜の口で聖人が上行菩薩であることを悟った、その後のふるまいは凡夫のふるまいではなくて、上行菩薩のふるまいであるといっておるが、それも上行菩薩の本當の意味がわかっておればその通りで、まことに結構だが上行菩薩を釈尊のお使いぐらいに解していたならば、はなはだ、真意に遠いといわねばならない。

作仏とは一体いかなることか、作仏ということとは、種子を覚知するのを作仏というのである。さて、このことについては私の稚筆を弄するよりは、寛尊の当流行事抄を引用した方がよいと思うので引用する。

「問う、蓮祖は乃ち是れ上行の再誕なり、故にまさにすべからく上行菩薩と顕れたまうべし、何ぞ久遠元初の自受用身と顕はれたまはんや、況んや復、久遠元初の自受用身は即ち是れ本因妙の教主釈尊にして上行等の主師親なり、故に涌出品に去く、悉く是れ我が化する所、大道心を発せしむ（師也）此等は是我子（親也）是の世界に依止す（主也）等云々、経文明白なり何ぞ別義を存ぜんや。

答う、此に相伝あり略引して之を示さん、血脈抄に云く、木地自受用身の垂迹、上行菩薩の再誕日蓮等云々、再誕の言、上二句に冠す、若外用によらば今の所問の如く上行の再誕日蓮なり、若し内証によらば自受用身の再誕日蓮なり、故に日蓮即是れ自受用身なり」とある。味読すれば充分である。多くの言葉を弄する必要はない。

次に問者の、内証によらば自受用身の再誕日蓮と称するか、その文証はどうかという問いについて、寛尊は五つの証拠をあげておる。

一は種脱勝劣の故にとして、諫曉八幡抄を引用する。

二は行位全く同きが故に、本因妙抄に云く「釈尊久遠名字即の御身の修行を末法今時、日蓮が名字即の身に移すなり」云々、血脈抄に云く「今の修行は久遠名字の振舞にけにばかりも相違なし」云々、行位全く同きなり、故に知ぬ蓮祖即是自受用身なり。

三に本因妙の教主の故に、血脈抄に云く「本因妙の教主本門の大師日蓮」云々、又云く「下種

法華經の教主の本迹、自受用身は本、上行日蓮は迹なり」

四に文証分明の故に、血脈抄に云く「久遠元初の天上天下唯我独尊は日蓮なり」云々、久遠元初の唯我独尊あに自受用身に非ずや、故に三位日順の詮要抄に曰く「久遠元初の自受用身とは蓮祖聖人の御事なりと取り定め申す可きなり」

五に現証顕然の故に、開目抄下云々に云く「日蓮は去る文永八年九月十二日子丑の時頸はねられぬ、此は魂魄佐渡に至る」等云々、まさに知るべし丑寅の時はこれ陰の終り死の終り、陽の始め生の始め陰陽生死の中間なり、故に知んぬ、子丑の時は末法蓮祖垂迹の凡身の死の終なり、故に頸をはねらると言うなり、寅の刻は是れ即ち久遠元初の名字本仏の生の始めなり故に魂魄等と言うなり、日我本尊抄見聞に云く「開目抄に魂魄佐渡に到るとは是れ凡夫の魂魄に非ずして久遠元初の名字本仏の魂魄なり」云々、然ば則ち蓮祖大聖佐渡以後に今日凡身の迹を開して久遠元初の本を顕はす、あに発迹顕本の現証に非ずや、是の故にすべからく知るべし、文底下種の寿量品に我実成仏と言うは我は即ち日蓮、成仏は即ち是れ自受用身なり」（聖典九三六ページ）

熟読下されば、聖人が本地は自受用身なること、従つてこれが、末法下種のわれらの主師親たることがわかるう。

筆者はこの意味において、竜の口以後は聖人を呼ぶに、佐前とことなることを示して、以後大聖人と尊称するものである。開目抄に仏を大人、聖人と称すという言葉がある。大聖人とは仏の

別名であり、現代にも生きておる仏をいう意味である。